



武隱叢話

五

終

津田文庫
文庫 1
1527
5



信の共長し之を是より本信相後く馬よる十
久字乃陸持之月石飯と高師、兼二番目の備
候よりとのといひ兵隊其のいひのいひの政大
軍等産るくくくくくくくくくくくくくくくく
何のいひのいひのいひのいひのいひのいひの
備候入城候にともいひ田沼船く川に備候
候も陸持のいひのいひのいひのいひのいひの
池付の政過敷く候に候に候に候に候に候に候に
よる別陸持のいひのいひのいひのいひのいひの
いひのいひのいひのいひのいひのいひのいひの

出入馬体く我存り終り終り候に候に候に候に
日乃り関東河橋のいひのいひのいひのいひの
同くいひのいひのいひのいひのいひのいひの
勿偏味方のいひのいひのいひのいひのいひの
中安の那く備候のいひのいひのいひのいひの
御流のいひのいひのいひのいひのいひのいひの
とたり候に候に候に候に候に候に候に候に候に
いひのいひのいひのいひのいひのいひのいひの
いひのいひのいひのいひのいひのいひのいひの
一 長利の方家代、夫のいひのいひのいひのいひの

り一書之に管領は桃井重成の志林とて
之を立管領の内足利康勝の言信の斯波由衛
と云代に管領補任りしもの不立信より成
武清の二家元帥の里野の相倉祐と云武清の
新前尾法法信も新前尾の相倉孝四郎と云
も尾法法信は織田一移りたる也武清の里野
と云孫清川の通とて秀形ははら取れり
自害しと孫とて細川氏を代信元と云と
く秀形又は尾法と云織田と云國の信元
とては信元の家(長)と云信元は信元の子

川二所信長と云と河内國の河内藩後も持統とて
河内國持統と云織田持統の家人の好長は討
亡しその子持統は自らの天正十年十月、河内
仁智山表の岡とて一掃しと討死しとてその子
藩後も藩との秀形ははら取れり討死し
ゆる留したるはとて尾法も眼言と云信長
塔りり其家元は河内國の信教と云と信言
と信法切を更より留しとて純勢絶其子孫由
此後河内國も河内國正且元と云と信言
尾法と云と信言と云今信言は信言の桃井の代

一 久りぬい草くくしん半佛身り飯り同
 一 はりせし怖くしん半佛身り飯り同
 一 苦くく那くくの方のくくぬい草くく
 一 けいひこそ程遠くく是非正しくくを唐紙と
 一 あふひは怒草くくくく半佛身り飯り同
 一 よすくを目し鼻のくくはくくかき滑くく
 一 飯僧は亂波より矢鯉くくれそくくくく
 一 よめくくくくくく流るるくく太ぬくくくく
 一 くくくくくくくくくくくくくく
 一 閑を系少陣のくく唐紙のくく白法の四半の

一 大ゆるくくくくくくくくくくくく
 一 の家たりのくく影揮くくくくくく
 一 ありくく指のくくくくくくくく
 一 ありくくありくくくくくくくく
 一 知おくくぬれお海くくくく金張りくくぬれくく
 一 舞くくのくくくくくくくくくく
 一 川流りくくくくくくくくくく
 一 唐紙金澤くくくく始くくく唐紙の唐紙くく
 一 けいひくくくくくくくくくくくく
 一 武辺勝もくくは持くくくくくくくく

先之進日峰紀法の要濃屋邊追出邊以內府
ハ馬軍の氣心少く箱邊より西に口より江
戸の川を流し今け透りてさかたに先光夜
年けおねおはり又楊屋流くとも流屋上を
一は獨之根は流くとも謀たあし申すの由
さり亦の変わり今新は四角の交防敵の是
情の場しお川只のさる度無信は流川より城を
秀治亦の形亦有利指入油流り若くは上
九城りしすの秀治利指流川より政人申す
かりとさり此にさるくは流川は出向流津

軍一々持固いす、流川はの切而し流地申す是
ハ、之は流川より入る秀治利指油流り、事完
安くは若くはさるくは入る流り、城亦向流川
は、河政入る、流川は、流川は、流川は、
り、さるくは流川は、流川は、流川は、
の、さるくは流川は、流川は、流川は、
し、流川は、流川は、流川は、流川は、
之、さるくは流川は、流川は、流川は、
流川は、流川は、流川は、流川は、
流川は、流川は、流川は、流川は、

之敵の要害は其構えとの謀しとあり兵分
上のいふ敵は其構えとの形は少押りしとあり其
東極あり中極あり西極あり北極ありとあり其
軍も少あり多ありとあり其構えも少あり多あり
おのち其ありありありありありありありありあり
と幅原の敵は其ありありありありありありありあり
い先を方平寄りありありありありありありありあり
九月十三日五江に言案幅原の敵は其ありありありあり
先陸しとありありありありありありありありありあり
五江に其ありありありありありありありありありあり

北河原討北城は其ありありありありありありありあり
ありありありありありありありありありありありあり
十二の卯の刻しありありありありありありありありあり
政は其ありありありありありありありありありありあり
ありありありありありありありありありありありあり
春日原中澤は其ありありありありありありありありあり
し極の敵城は其ありありありありありありありありあり
い要害は其ありありありありありありありありありあり
す知しとありありありありありありありありありありあり
子修程を其ありありありありありありありありありあり

之業たるを牛より未過の由りて其の功なり
海は紅のゆりりれ 旗はさきり上格くくえ
伏格くく列の 飯の旗はうりて之海に各旗
より伏兵七百余四列の 能く討く 四り上格
と、号は清く 徳はさきり伏兵乃將制念誓
遠は清く 徳はさきり 徳はさきり上格くく
馬よりさきり 徳はさきり 徳はさきり 徳はさきり
ハ 徳はさきり 徳はさきり 徳はさきり 徳はさきり
凡上格くく 徳はさきり 徳はさきり 徳はさきり 徳はさきり
飯少くく 徳はさきり 徳はさきり 徳はさきり 徳はさきり

秋くく 徳はさきり 徳はさきり 徳はさきり 徳はさきり
持徳はさきり 徳はさきり 徳はさきり 徳はさきり 徳はさきり
徳はさきり 徳はさきり 徳はさきり 徳はさきり 徳はさきり
し 進歩り 徳はさきり 徳はさきり 徳はさきり 徳はさきり
力も 徳はさきり 徳はさきり 徳はさきり 徳はさきり 徳はさきり
徳はさきり 徳はさきり 徳はさきり 徳はさきり 徳はさきり
馬はさきり 徳はさきり 徳はさきり 徳はさきり 徳はさきり
徳はさきり 徳はさきり 徳はさきり 徳はさきり 徳はさきり
徳はさきり 徳はさきり 徳はさきり 徳はさきり 徳はさきり
徳はさきり 徳はさきり 徳はさきり 徳はさきり 徳はさきり
徳はさきり 徳はさきり 徳はさきり 徳はさきり 徳はさきり

ありしにわたりしうけも合しきとに上りしにの戦兵
坂戸は高兵つ流と陣ありるよき事ありし味し
りしにわたりしに上りしにわたりしにわたりしに
と歌の道は流と道ありしにわたりしにわたりしに
たしきしにわたりしにわたりしにわたりしにわたりしに
た進物多事しにわたりしにわたりしにわたりしに
十又まの流と進物多事しにわたりしにわたりしに
わたりしにわたりしにわたりしにわたりしにわたりしに
流と進物多事しにわたりしにわたりしにわたりしに
わたりしにわたりしにわたりしにわたりしにわたりしに
わたりしにわたりしにわたりしにわたりしにわたりしに

坂部市街と造酒元が有流元はたしきしにわたりしに
しにわたりしにわたりしにわたりしにわたりしにわたりしに
谷出唐河東唐元はたしきしにわたりしにわたりしに
流と進物多事しにわたりしにわたりしにわたりしに
を流と進物多事しにわたりしにわたりしにわたりしに
式部と進物多事しにわたりしにわたりしにわたりしに
と流と進物多事しにわたりしにわたりしにわたりしに
との流と進物多事しにわたりしにわたりしにわたりしに
しにわたりしにわたりしにわたりしにわたりしにわたりしに
流と進物多事しにわたりしにわたりしにわたりしに

余の討た波能の落着けり地休地休切り序へて水
 二夜に度く河原の威揚揚舟中陸へぬりなり上京
 主水一人大将の弟とて一自身の由地能くを
 一合戦の事此事をえし由地能く運りてはる勝利
 一此出のまにのまににさへはるなりしに後者も
 一大周は毛とて一應に例をいへるなりしに
 一此たより其に戦ふに一其をその城を獲りてはる
 一此知く由か由地能くは去り合入其後よりはる
 一と煙天の境訃市の一戰をいへるなりしに
 一よりうたて皆七の百人をいへるなりしに

五五に六故軍は移来たる陸山前集候合の地能入
 二二の地能くは上京の地能くは二のより其の陸山前
 一此まにのまにのまにに澤田在鳥ヶ茶屋の地能くは
 一其後より其のまにのまにの地能くは二のより
 一此條より其のまにのまにの地能くは二のより
 一此種より其のまにのまにの地能くは二のより
 一此京に候入高石名義馬行六元未切の地能くは
 一其後より其のまにのまにの地能くは二のより
 一此各々の地能くは二のより其のまにのまにの
 一此より其のまにのまにの地能くは二のより

明の漢運より一戦したる言同是九日早夫此の第其に
菅原の所よりと急ぐ其谷をりぬるに九火也其後と
操能所前上揚方と官軍と情一香紫同啓多礼に
城中を討つ酒造防集川守と一先河物と諸地刑
其方由以上揚方其後河端彼とたに二方河百六千
余討九初大討して元ノ陸川九昔法泉誠忠
偏之礼ノ陸一ありと其佛して川守より其方を
りぬるに揚方保り其元と文田の敵とつと其後法
と追々河討つ九と一其元自身も其方とつと
其河を昔法と川守とと其方と討つて河守の海と

川守海軍先攻其方とつと余進其河守とつと其方
斗つと横合の進守とつと揚方と進守とつと其方
南其揚とつと揚方とつと其方とつと其方とつと其方
欲軍新の揚方とつと其方とつと其方とつと其方
河守海軍とつと進守とつと揚方とつと其方とつと其方
其方とつと揚方とつと其方とつと其方とつと其方
追つと進守とつと揚方とつと其方とつと其方とつと其方
横合とつと揚方とつと其方とつと其方とつと其方
つと揚方とつと其方とつと其方とつと其方とつと其方
切つと揚方とつと其方とつと其方とつと其方とつと其方

乃如く一々之りて之を皆之を以て此處に留めし今の故蹟の如
鏡より一々之りて之を皆之を以て此處に留めし今の故蹟の如
右系系同（中略）之を皆之を以て此處に留めし今の故蹟の如
東中一切之を皆之を以て此處に留めし今の故蹟の如
後日一々之りて之を皆之を以て此處に留めし今の故蹟の如
二市橋河川に於て之を皆之を以て此處に留めし今の故蹟の如
右系系同（中略）之を皆之を以て此處に留めし今の故蹟の如
遠く二市橋河川に於て之を皆之を以て此處に留めし今の故蹟の如
之を皆之を以て此處に留めし今の故蹟の如
たよりて之を皆之を以て此處に留めし今の故蹟の如

の如く一々之りて之を皆之を以て此處に留めし今の故蹟の如
天竺の如く一々之りて之を皆之を以て此處に留めし今の故蹟の如
方諸國の如く一々之りて之を皆之を以て此處に留めし今の故蹟の如
二百餘の如く一々之りて之を皆之を以て此處に留めし今の故蹟の如
政宗の如く一々之りて之を皆之を以て此處に留めし今の故蹟の如
城の如く一々之りて之を皆之を以て此處に留めし今の故蹟の如
七寸五分の如く一々之りて之を皆之を以て此處に留めし今の故蹟の如
松東海道の如く一々之りて之を皆之を以て此處に留めし今の故蹟の如
石別りの如く一々之りて之を皆之を以て此處に留めし今の故蹟の如
何連の如く一々之りて之を皆之を以て此處に留めし今の故蹟の如

豊兵衛の三郎三郎をこゝろに置て、千石の中へ、遊惰を
上取方せし道に遊惰のつゝの言をせし中へ
より申し、若くは、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、
十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、
二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、
二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、
三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、
四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、
五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、
六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、
六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、
七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、
八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、
九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、
百、百一、百二、百三、百四、百五、百六、百七、百八、百九、
百十、百十一、百十二、百十三、百十四、百十五、百十六、百十七、
百十八、百十九、百二十、百二十一、百二十二、百二十三、百二十四、
百二十五、百二十六、百二十七、百二十八、百二十九、百三十、
百三十一、百三十二、百三十三、百三十四、百三十五、百三十六、
百三十七、百三十八、百三十九、百四十、百四十一、百四十二、
百四十三、百四十四、百四十五、百四十六、百四十七、百四十八、
百四十九、百五十、百五十一、百五十二、百五十三、百五十四、
百五十五、百五十六、百五十七、百五十八、百五十九、百六十、
百六十一、百六十二、百六十三、百六十四、百六十五、百六十六、
百六十七、百六十八、百六十九、百七十、百七十一、百七十二、
百七十三、百七十四、百七十五、百七十六、百七十七、百七十八、
百七十九、百八十、百八十一、百八十二、百八十三、百八十四、
百八十五、百八十六、百八十七、百八十八、百八十九、百九十、
百九十一、百九十二、百九十三、百九十四、百九十五、百九十六、
百九十七、百九十八、百九十九、百、

三日の由より、思異、程、能の如、裁、合、の、い、ま、
の、陽、彩、は、序、の、今、の、飄、華、を、才、た、る、は、遊、惰、の、跡、
決、令、法、の、一、成、政、中、の、い、ま、の、序、新、意、を、才、た、る、
前、日、慶、治、の、い、ま、の、序、一、山、名、及、海、名、を、遊、惰、
遊、惰、利、利、の、五、回、重、の、四、人、慶、治、の、い、ま、の、序、
は、入、郭、令、と、遊、惰、方、存、才、た、る、の、い、ま、の、序、
法、法、令、と、合、裁、初、の、い、ま、の、序、遊、惰、在、田、南、東、
の、い、ま、の、序、遊、惰、の、い、ま、の、序、一、所、斗、大、重、顔、と、
一、遊、惰、の、い、ま、の、序、一、種、子、存、昔、遊、惰、と、
之、の、無、才、は、才、た、る、の、い、ま、の、序、遊、惰、の、い、ま、の、序、

傳下書して例の存存の先をなすも其の
足るなり國の元は其の先なり其の國及は其
佐めりて其の先なり其の國の存存より其の先
く其の先なり其の國の先なり其の先なり其の先
其の先なり其の國の先なり其の先なり其の先
其の先なり其の國の先なり其の先なり其の先
其の先なり其の國の先なり其の先なり其の先
其の先なり其の國の先なり其の先なり其の先
其の先なり其の國の先なり其の先なり其の先
其の先なり其の國の先なり其の先なり其の先

其の先なり其の國の先なり其の先なり其の先
其の先なり其の國の先なり其の先なり其の先
其の先なり其の國の先なり其の先なり其の先
其の先なり其の國の先なり其の先なり其の先
其の先なり其の國の先なり其の先なり其の先
其の先なり其の國の先なり其の先なり其の先
其の先なり其の國の先なり其の先なり其の先
其の先なり其の國の先なり其の先なり其の先
其の先なり其の國の先なり其の先なり其の先
其の先なり其の國の先なり其の先なり其の先
其の先なり其の國の先なり其の先なり其の先
其の先なり其の國の先なり其の先なり其の先

一
加度正五年の酒を何處に
も坂川と名を言ふは其の一滴も少くも其の先
し下戸と名を言ふは其の一滴も少くも其の先

城門太形のまゝとあるが、この城門の取壊は
江戸のついでに大坂のついでに、勝の取壊は
此より酒はたいさうあるが、血酒と担持たるを
酒は酒は、今可と流るるは、城門は、
担持たるを酒は、一壺の酒は、
始り、城のまゝ、赤い、
の取壊は、城の取壊は、
一壺の酒は、
始り、城のまゝ、赤い、
の取壊は、城の取壊は、
一壺の酒は、

乃と、日中、
江戸、
外、
く、
り、
う、
と、
高、
川、
と、

江之邊池田に在る輝光の御名を在りて在りて天地之氣
と云々

一 法府より江之邊に在る御名を在りて在りて天地之氣
方角合也信り別川中徳合氣の辰上秋輝光也
海に信云旗也、是道信云、誠切なるは和信云
侍より信り別川中徳合氣の辰上秋輝光也
と云々、初編也、是道信云、誠切なるは和信云
侍より信り別川中徳合氣の辰上秋輝光也
と云々、初編也、是道信云、誠切なるは和信云
侍より信り別川中徳合氣の辰上秋輝光也

上秋の御名を在りて在りて天地之氣
と云々、初編也、是道信云、誠切なるは和信云
侍より信り別川中徳合氣の辰上秋輝光也
と云々、初編也、是道信云、誠切なるは和信云
侍より信り別川中徳合氣の辰上秋輝光也
と云々、初編也、是道信云、誠切なるは和信云
侍より信り別川中徳合氣の辰上秋輝光也
と云々、初編也、是道信云、誠切なるは和信云
侍より信り別川中徳合氣の辰上秋輝光也

多中なるに其抄に感なき一甲列方より是に盡
しことと信別川中流に合流し之をいひ初め天文三
年より中川中流に合流し之をいひ合流しし信濃信
信をたむるに別川中流の中より事し信濃合
流河田曲流信濃信より討九郎村と名付
るは討河田まの致をりて信をりて行りて
討し之をいひ月止あり信信宿あり信去り宿
信信旗中流流りてとて信より是に別川中流
しとて夜信去り信信信の抄より信信別川中流
討九郎村より信信信信信信信信信信信信信信
信信信信信信信信信信信信信信信信信信信信

龍麻川は河に信をりて信をりて信をりて信をりて
一系六節小の原を流りて信をりて信をりて信をりて
討九郎村中流に合流し之をいひ初め天文三
年より中川中流に合流し之をいひ合流しし信濃信
信をたむるに別川中流の中より事し信濃合
流河田曲流信濃信より討九郎村と名付
るは討河田まの致をりて信をりて行りて
討し之をいひ月止あり信信宿あり信去り宿
信信旗中流流りてとて信より是に別川中流
しとて夜信去り信信信の抄より信信別川中流
討九郎村より信信信信信信信信信信信信信信

武隱叢話卷之五 一石古光物語 尾

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged, yellowed paper. The script is dense and fills most of the page. The words are difficult to decipher due to the cursive style and fading of the ink. The text appears to be organized into several lines, with some words being larger and more prominent than others. The overall appearance is that of an old, well-used document.

